

## 中等社会科における授業システム化の研究(VI)

——小単元「多民族国家アメリカ」の授業作りを事例として——

棚橋 健治 土肥大次郎 片上 宗二  
池野 範男 大江 和彦 高田準一郎  
和田 文雄

### I はじめに

本継続研究は、中等社会科の授業作りの技法を体系的に説明することを試みるものである。通常、授業研究は出来上がった授業を指導案の形で示すか、さらにそれにもとづいて実施された授業の記録を示すかして、それらを分析・評価するというものになっている。ここでは、授業者がそのような授業を作成するに至る様々な重要なプロセスが明示されないため、他の題材に適用して追試することが難しくなっている。本研究では、テーマ設定から教材、教授学習過程、評価に至るまで授業者がひとつの授業をつくる営為を体系的に解明し、システム化の方途を考察する。そのため、以下の課題を設定し、それらに応える形で、われわれは、1995年度より具体的な授業開発を行ってきた。

①事例となる授業のテーマを選定し、指導案を作成する。

②作成した指導案の具体的な作成過程を明示し、それを一般化する。

- ・テーマ選定はどのように行ったか。
- ・選定されたテーマについて、内容の基礎となる社会諸科学の研究成果をどのように抽出し、整理したか。
- ・社会諸科学の成果からどのように単元の目標を設定したか。
- ・単元の目標達成のためにどのように教授・学習過程を構成し、そのための教材・教具はどのように選定、作成したか。

その研究成果は、小単元「人身の自由」<sup>(1)</sup>「中国の近代化」<sup>(2)</sup>「イスラム教の成立」<sup>(3)</sup>「ハワイ先住民の土地問題」<sup>(4)</sup>「境界人による国際交流」<sup>(5)</sup>の計画として発表してきた。これらはいずれも高等学校の地理歴史科もしくは公民科を対象としたものである。本年度は、中学校社会科地理的分野における小単元「多民族国家アメリカ」の授業開発を通して、上記課題に対するひとつ

の答えを探る。

日々、われわれは多くの授業を作成・実践しているが、その作成過程自体を明確に意識することは少ない。多くの実践者が無意識のうちに行っている授業作成の手順を一般化して示すと、それは次の4つのステップを踏んでいる。

①自分の社会科授業観を確認する。「社会科とはどのような教科か」に対する答えは、授業を作成する者なら誰でももっている。しかし、それは多くの場合、自分自身でも明確に意識するものとはなっていない。社会科は、通常「社会認識形成を通して市民的資質を育成する」と性格付けされるが、社会認識、市民的資質は多義であり、その育成の論理も多くの考え方がある。授業作成の出発点は、まず、その点を明確にすることである。

②明確にした社会科の性格を具体的な形あるものとするために、そこで求められる学力を明らかにする。

③該当する単元で、その学力のどの部分を育成しようとするのか決定し、そのために最も有効な対象事象を選定する。

④発問とそれによって子どもに習得させる知識の組織化、子どもに提示する資料と子どもにさせる活動の選択・組織化を行うことにより、予想される授業展開を指導案として整理する。

本稿では、小単元「多民族国家アメリカ」の授業作成に即して、これら4つのステップについて、各々、考察する。

### II 地理教育の在り方の検討

#### 1. 地理を教える地理教育から社会認識教育としての地理教育へ

社会科の授業作りの第一歩は、その教科目の性格をどのように規定するかを明確にすることである。それは1時間の授業やひとつの単元だけの問題ではない。

地理は歴史とともに社会科の重要な柱のひとつと考えられているが、地理の概念には様々なことが含まれるため、多様な地理教育論が展開されてきた。まず、社会科でなぜ地理を教えるのか、その場合の地理とは何なのか、についての自己の意識を自覚化することが求められる。

今日一般的にみられる地理の授業の多くは、「地理で地理を教える授業」となっている。それらは地理を目的視し、地理的事実の教授を行う授業となっている。日本や世界の諸地域、諸国自体等を知ることが目的とされ、古典的な羅列的地誌授業が展開され、事象の空間的配置を極めて重視する記述がなされる。地理的事実の教授を行う授業では、対象とする地域を構成する要素のすべてを知ることによる地域の全体的把握がめざされる。したがって、アメリカ合衆国についての授業では、合衆国の位置、地形、気候、産業、民族構成、資源、文化、宗教、歴史等々が順次配列され、教授される。このような授業は、事象の羅列的学習による断片的知識の一覧表作りとなる。地域をわからせることが地理教育だとするにも関わらず、統一的な地域像の把握を困難にする授業となっている。また、そこで言われる地理的見方・考え方は、地理的事象に対する思考を意味するのではなく、狭義の地理的技能に限定されている。

地理が子どもの教育において価値あるものになるためには、子どもが生きる社会を理解するのに役立つことが求められる。どのように他国や他地域を理解させれば、子どもが生きる社会を理解するのに役立つのか。それは、子どもが生きる社会を条件付ける（影響する）ものとしての他国・他地域の理解であり、あるいは、子どもが生きる社会の在り方の考察に寄与するような、子どもが生きる社会と類似もしくは異質の事象や問題をもつものとしての他国・他地域の理解であろう。したがって、地理学習において他国や他地域を理解するとは、その地理を学ぶことでもなければ、そこに住む人々の生活様式を知り、日本人のそれと比較するということでもない。その国や地域のもつ現実の矛盾や問題を知ることであり、それらの矛盾や問題を説明する理論を習得することによって、その矛盾や問題の起因や解決・解消の方向を考察することであろう。国や地域の矛盾や問題を説明する理論は、系統地理学の理論のモザイクではなく、政治学、社会学、経済学等の社会科学理論に基づいて、国の体制や地域の社会構造をとらえる理論である。アメリカ合衆国を学習する時に重要なことは、合衆国の地理的事実ではなく、合衆国の社会構造であるという考え方である。

このような考え方にたつ地理の授業例として、「東

南アジア」の教授書試案がある。<sup>6)</sup>そこでは“従属理論”と“東南アジア論”を用いて、東南アジア諸国の社会構造を子どもにとらえさせている。“従属理論”は、先進国と発展途上国との従属関係と発展途上国内における受益者層と貧困層との従属関係を解明している。そして、“東南アジア論”は、受益者層と貧困層との横断的分化による社会的矛盾の拡大、治安機構の拡大・整備による受益者層の権威主義的支配体制の強化という東南アジア諸国の特色を解明している。

このような地理教育論は、社会科とは子どもが社会的事象を科学的に説明できるようにする教科であると考え、そのような社会科の一部としての地理教育は、社会科学に基づいた社会構造論を子どもにとらえさせるような指導をになうべきものであるという考えである。つまり、社会認識教育としての地理教育である。

## 2. 地理的思考力育成を図る地理教育

地理教育においては「地理的見方・考え方」「地理的思考力」といったことばがしばしば用いられ、その育成の重要性は、近年ますます強調されるようになっていく。他方、社会認識教育としての地理教育は、そのような地理認識の固有性への執着を断ち切ることを求めており、地理認識固有の見方・考え方の育成という点では不十分になることは否めない。

地理教育において育成すべき思考力を地理的思考力に求めることは、社会認識教育としての地理教育の性格付けを曖昧にし、ひいては社会科における地理の役割の後退にもつながる。したがって、地理教育の在り方を検討する上で、地理的思考力育成を中核に据えることは、地理教育の将来にとって最良の選択とは言えないかもしれない。しかし、地理的思考力育成が強く求められている地理教育の現状にたつと、地理的思考力育成を図る地理教育の在り方を検討しておくことも必要であろう。

地理的思考力育成に関するこれまでの論議では、読図技能、地図化技能など狭義の方法面ばかりが強調されたり、異なるレベルの思考力が恣意的、羅列的に論じられたりしており、その結果、地理的思考力育成を体系的に図る地理授業の構成は困難になっている。社会科授業作りの次の段階としてなすべきことは、地理授業構成の基盤となりうる形で地理的思考力を確定し、その育成の論理を解明することである。

## III 地理的思考力育成の論理の解明

授業構成の基盤となりうる地理的思考力育成の論理の解明は、その実現を図って作られているカリキュラムを分析し、そこから求める論理を抽出することによってなし得る。そのような分析対象として、ここではア

アメリカで開発された地理教育カリキュラムARGUSを取り上げる。<sup>(7)</sup>

ARGUS (Activities and Readings in the Geography of the United States) は、1995年にアメリカ地理学会によって開発された中等教育(9~12学年)用のアメリカ地理のカリキュラムであり、1980年代にアメリカで高まった地理教育復興運動の流れをくむものである。ARGUSでは、古典的な地誌学習特有の、諸地域についての大量の事實的知識の習得には関心が払われぬ。生徒が様々な地理的スキルを駆使しながら学習を進めることによって、地理的思考力を形成するように組織されている。

ARGUSは、三層の地理的思考力育成を企図しており、それらは各々、地理カリキュラム全体、大単元、小単元の編成あるいは構成原理となっている。

カリキュラム全体の編成原理となる地理的思考は、地理の根本問題とされる人間の活動と環境との関係を捉えることである。人間の活動と環境の関係は、3つの異なった見方が成り立つ。第1は、人間の活動に及ぼす環境の影響の大きさを捉え、人間の活動の環境による規定を考えるとというものである。第2は、環境を人間の活動に対して、それが可能な場を提供するものと捉え、人間による環境の利用を考えるとというものである。第3は、人間による環境の改変およびそのことの間人への影響を考えるとというものである。

大単元の構成原理となる地理的思考は、地理認識固有の問題に対して、その問題に固有のアプローチを選択し、実施することである。たとえば、人間の活動の環境による規定を考えると人口地理では、環境に規定される居住生活という地理認識固有の問題に対し、ふたつの説明をなす。ひとつは、人口の地域的分布に関する説明であり、いまひとつは、人口の社会変動に伴う地域の変容に関する説明である。つまり、地域を対象とする考察に基づいて人口現象を通してみた地域像を明らかにし、「なぜ、人々はそこに暮らしているのか」を考えるのである。

具体的には、たとえば、アメリカ先住民を事例として居住生活における自然環境の影響の大きさを確認した後、合衆国史上の各時期に顕著にみられた海外から合衆国への人口移動、19世紀以降顕著になった国内での人口移動、さらに近年比較的増加している短期的な人口移動を確認し、歴史的事実としての人口移動の知識が形成される。そして、そうした知識に基づいて人口現象についての地理認識固有のアプローチがなされる。それは、ひとつは人口移動の結果としての人口の地域的分布の把握であり、いまひとつは人口移動に伴う地域の変容の把握である。

人口の地域的把握では、人口や何らかの指標からみた人口構成ならびに各々の地域的分布について、自然、文化、経済といった集落や地域を構成する様々な要素を根拠として多面的に説明することが求められる。それは、たとえば次のような問に対する答えを探求することになる。「過去において人口はどのような場所に移動したか、各時代に集落はどのような場所に立地したか」「ある集落や地域に移動したのは、どのような構成の人口か」「ある特定の構成の人口がその集落や地域に移動したのはなぜか」「過去において定着した人口構成上の特徴は、それ以後どうなったか」「現在、集落や地域の人口構成上の特徴はどのようにになっているか」などである。

地域の変容の把握では、比較的最近みられるようになった集落や地域の発展・都市化という変容について、各時期の主要な交通網による集落間の結びつきを根拠として多面的に説明することが求められる。それは、たとえば次のような問に対する答えを探求することになる。「過去において、人口増加がみられた集落や地域はどこか」「過去において、特定の集落や地域が発展・都市化したのはなぜか」「過去の集落や地域の発展・都市化により、それらの集落や地域の特徴はその後どのようになったか」「現在、様々な特徴からみた集落や地域の個性はどのようにになっているか」などである。

小単元の構成原理となる地理的思考は、大単元レベルで設定された地理認識固有の問題に対して、位置に関する一般的法則を用いて説明することであり、同時にそうした思考を支える地理的諸技能(従来、これをさして地理的思考とすることが多かった)もその下位に組み込まれる。たとえば、特定の集落や地域の人口について、その特定の集落や地域に限定されない一般的な法則を媒介として推測する。

具体的には、特定の集落や地域の人口についての「なぜ」を考える場合、まず、人口の状況を把握し、次にそれらの集落や地域に限定されない人口に関する一般的な法則を見出し、それに基づいて、なぜに答える。あるいは集落や地域を構成する人口以外の要素についての特定の集落や地域の状況を把握し、そうした状況の下ではその集落の人口はどのようになるかを考察する。

法則を媒介としたこのような思考の下位に、対象となる特定の集落や地域の状況それ自体や、使用する一般的な法則それ自体の同定・確認が位置づく。集落や地域の状況それ自体を確認する場合、人口についてもそれ以外の諸要素についても基本的には同じ技能が求められる。地図、統計表、グラフ、航空写真などのデー

タを読みとり、そこから収集した情報を加工したり組織化したりする。たとえば地図化したり、全体に占める割合や平均値との相違など統計的処理をしたり、それをグラフや表に表したりである。一般的な法則の確認には、人口に関する分布とそれ以外の要素の分布の類似性や一致点を地図から見出す、あるいは考察の対象とされている集落や地域以外の集落などで明らかになっている位置に関する関係を一般化する、といったことが求められる。

本研究では、ARGUSの分析によって引き出されたこのような地理的思考力の構造をもとに、その育成が実現できる地理授業の構成を行った。

#### IV 形成を図る地理的思考力と対象事象の設定

明らかになった地理的思考力の構造とその育成の論理に基づいて、単元の具体的な目標設定を行う。そのためには、広範な地理的思考力の中から当該単元で形成を図るものを限定し、そのために最も適当な具体的な地理的事象を選定する。

従来之地誌教育では、対象となる事象自体に地理教育内容としての価値の根拠を見出していた。一方、地理的思考力育成を図る本単元では、地理的思考力の育成を組織的・計画的に進めるために、その体系に基づいて教育内容を策定することになる。そして、副次的に対象となった事象や地域それ自体についての理解を深めることをめざすことになる。

本研究では、社会の変化と人口の地域的分布という地理的事象の変容との関係を、子どもが説明できるようになることを、形成すべき地理的思考力として設定し、それを小単元の目標とした。そしてそれを具体化するものとして3つの到達目標、「人口分布は経済活動と深い関係がある」「地域の経済活動の変化に伴って、人口分布が変化する」「地理的事象の空間的規則性は、地図化によって分布を視覚的に捉えることで考察し易くなる」を設定した。

これらの一般的な理論を発見・適用する具体的な場として、アメリカ合衆国を取り上げ、そこにおける地域による人種民族構成の相違の実態とその原因の解明を行う。それを通して、社会の変化と人口分布の変容の関係を理解させ、同時に素材として取り上げた、アメリカ合衆国の人口分布とその変容自体を理解させる。

#### V 授業案の作成

設定した到達目標に達するために、発問と子どもに習得させる知識を子どもの心理を踏まえて理論的に配列し、組織化する。

まず、導入部においては、小単元全体を通して探求

し続ける問題意識を明確にさせる発問を提示する。それが「なぜアメリカ合衆国では、同じ国内なのに州によって人種民族構成にこれほど大きな違いがあるのだろうか」であり、本単元のメイン・クエスチョンとなる。これによって、社会の変化と人口分布との関係の存在を直感的に発見させ、学習の動機付けを図る。

展開部は、「なぜ、アメリカ南部で、アフリカ系の割合が高いのだろうか」「北部の大西洋岸や五大湖周辺で、アフリカ系の割合が比較的高くなっているのはなぜか」のふたつの間に対する答えを探求する過程となっている。前者によって、経済活動と人口分布との関係を説明させ、後者によって経済活動の変化に伴う人口分布の変容を説明させる。そして、「地理的事象の空間的規則性は、地図化によって分布を視覚的に捉えることで考察し易くなる」ことを、具体的活動を通して意識化させるために、たとえば「名前を列挙するだけでは分からなかったことで、地図にしてみても分かることはあるだろうか」と問う。

終結部においては導入部で提示された発問を再度示す。子どもは、導入部で直感的に、展開部で分析的に捉えてきたアメリカ合衆国の地域による人口構成の相違に関する理論を総合して、一貫性のあるひとつの理論に整理する。同時に、そこからアメリカ合衆国に限定されない一般的な理論「人口分布は経済活動と深い関連があり、その変容は諸地域の経済活動の変化によって生じる」を導き出す。さらに、最後に展開部で取り上げなかったごく最近の人口分布の変化を、その理論を使って説明させることにより、子どもの中での転移可能性を高めることで授業を締めくくる。

発問と子どもが習得する知識の組織化ができたならば、次に、提示資料と子どもの活動の選択・組織化を行う。知識の習得は、常に子ども自身の批判的吟味の結果としてなされなければならない。提示資料はそのための材料あるいは証拠として機能するものである。

子どもの外面的活動と思考の深さは必ずしも一致しない。子どもが動くことを過度に重視すると、形式的な操作主義に陥る。実際に作業をして形に表すことによって初めて見えてくるものがそこにはあるか、それは本授業の中核たるか。このような観点から、子どもにさせる活動を選択する。

## VI 小単元「多民族国家アメリカ」教授書試案

### 1. 小単元名 多民族国家アメリカ (中学校社会科地理的分野)

### 2. 小単元の目的

アメリカ合衆国の地域による人種民族構成の相違の実態とその原因の解明を通して、社会の変化と地理的事象の変容の関係を考察する。

### 3. 到達目標

#### 1. 人口分布は経済活動と深い関連がある。

①アメリカ合衆国は、多様な人種民族から構成されている。

a. アメリカ全体では、ヨーロッパ系80%、アフリカ系12%が多く、ネイティブ・アメリカンとイヌイットが0.8%、中国系0.7%、日系0.3%、その他5.8%となっている。

b. 世界各地からの移民によってつくられた国であるアメリカは、多様な人種民族から構成されている。

②アメリカ合衆国は、地域により人種民族の構成に違いがある。

a. ニューメキシコ州はヒスパニックが40%も占めるが、アイオワ州やアーカンソー州にはヒスパニックはほとんどいない。

b. ミシシッピ州はアフリカ系が30%を越えるが、バーモント州にはアフリカ系はほとんどいない。

③アメリカ合衆国における地域による人種民族構成の相違は、各々の地域の経済活動と深い関連がある。

a. 南部では多くの労働力を必要とする綿花栽培プランテーション農業が盛んに行われており、アフリカ系の人々が多い。

b. 家族労働による自給自足農業の北部では多くの労働力は必要とされず、アフリカ系の人々は多くない。

#### 2. 地域の経済活動の変化に伴って、人口分布が変容する。

①アメリカ合衆国の各地域の人種民族構成は、時間の経過にしたがって変化してきた。

a. 19世紀前半までは南部にアフリカ系の人々が多かったが、19世紀後半から北部にもアフリカ系の人々が増え始めた。

b. 20世紀後半から、アフリカ系の人々の北部から南部へのUターンや西部への進出がみられる。

②アメリカ合衆国の各地域の人種民族構成は、それらの地域の経済活動の変化にしたがって変化してきた。

a. プランテーションによる綿花栽培で作付け制限や機械化が行われ、労働力が余るようになると南部のアフリカ系の人々は減少した。

b. 北部大西洋岸や五大湖周辺で商工業が発達し、労働力が必要になると、労働機会を求めて流入した人々によって北部のアフリカ系の人々は増加した。

c. 工業地域が西部や南部にも拡大すると、それらの地域でもアフリカ系の人々が増加した。

#### 3. 地理的事象の空間的規則性は、地図化によって分布を視覚的に捉えることで考察し易くなる。

①地理的事象の空間的な規則性や傾向性は、それらの事象を地図に表すことにより明らかになる。

a. 統計表から得られるアメリカ合衆国においてアフリカ系の人口割合が高い州の名前を地図で着色すると、それらの州が南の方に位置していることがわかる。

②空間的な規則性や傾向性をもつ地理的事象の因果関係は、分布が一致する事象を発見することにより考察できるようになる。

a. アメリカ合衆国でアフリカ系の人口の多い地域を表す地図と農業地域の地図とを比較すると、綿花栽培を中心とする地域にアフリカ系人口が多いことがわかる。

4. 小単元の展開

	発問	教授・学習活動	資料	子どもが習得する知識
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>写真のアメリカの中学生をみて、何か気づくことはないだろうか。</li> <li>アメリカの有名人で知っている人の名前を挙げてみよう。それらの人々の人種民族はどうなっているだろうか。</li> </ul>	T：発問する P：答える T：発問する P：答える	①「アメリカの中学生」	<ul style="list-style-type: none"> <li>肌の色、瞳の色、毛髪の色や形態などのことなる子どもたちが写っている。彼ら彼女らは、人種や民族が異なると思われる。</li> <li>(クリントン大統領、マイケル・ジョンソン、キング牧師、ケネディー、マクガイヤー、タイガー・ウッズ、シルベスタ・スタローン、ケビン・コスナー、マリリン・モンロー、アインシュタイン、ジェロニモ等々) 世界各地からの移民によってつくられた国であるアメリカは、多様な人種民族から構成されている。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>アメリカの人種民族構成はどのようになっているか。</li> </ul>	T：資料を提示し、説明する	②「アメリカの人種民族構成」	<ul style="list-style-type: none"> <li>アメリカ全体では、ヨーロッパ系80%、アフリカ系12%が多く、ネイティブ・アメリカンとイヌイットが0.8%、中国系0.7%、日系0.3%、その他5.8%となっている。また、たとえば同じヨーロッパ系といってもアングロサクソンもあればラテンもある。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>州によって人種民族構成に違いはみられるか。</li> </ul> <p>◎なぜアメリカ合衆国では、同じ国内なのに州によって人種民族構成にこれほど大きな違いがあるのだろうか。</p>	T：資料を提示する P：答える T：予想させる P：予想する	③「アメリカの州別統計」	<ul style="list-style-type: none"> <li>州によって、人種民族構成は大きな違いがみられる。ニューメキシコのようにヒスパニックが40%も占める州もあれば、アイオワやアーカンソーのようにほとんどいない州もある。ミシシッピのようにアフリカ系が30%を超える州もあれば、バーモントのようにほとんどいない州もある。</li> <li>(州によって様々な条件が大きく異なり、アフリカ系の人々にとって暮らしやすいところとそうでないところがあるのではないか。歴史的原因で何らかのそのような棲み分けが形作られてきたのではないか。)</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>○アフリカ系を例として考えてみよう。アフリカ系の割合が低い州、高い州は、それぞれどのような州か。</li> <li>・アフリカ系の割合が低い州（1%未満）、高い州（20%以上）は各々どこか、名前を、挙げなさい。</li> <li>・アフリカ系の割合が低い州、高い州を、それぞれ白地図に着色しなさい。</li> </ul>	T：発問する T：発問する P：資料③をみて、授業プリントに記入する T：作業を指示する P：州別白地図に着色する	③「アメリカの州別統計」 ④州別白地図	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイダホ州、サウスダコタ州、ニューハンプシャー州、ノースダコタ州、バーモント州、メーン州、モンタナ州、ユタ州、ワイオミング州はアフリカ系の割合が低く、アラバマ州・サウスカロライナ州、ジョージア州、ノースカロライナ州、ミシシッピ州、メリーランド州、ルイジアナ州はアフリカ系の割合が高い。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○アフリカ系の割合が低い州、高い州は、それぞれどのような州か。</li> </ul> <p>・名前を列挙するだけでは分からなかったことで、地図にしてみても分かることはあるだろうか。</p>	T：発問する P：着色した州別地図に基づいて答える	④着色した州別地図	<ul style="list-style-type: none"> <li>○北の方に位置する諸州ではアフリカ系の割合が低く、南の方に位置する諸州ではアフリカ系の割合が高い。</li> <li>・地理的事象の空間的な規則性や傾向性を読みとるために、地図化が有効である。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●なぜ、アメリカ南部で、アフリカ系の割合が高いのだろうか。</li> <li>・もともとアフリカ系の人々が、アメリカに来たのはなぜか。</li> <li>・黒人奴隷が、アメリカに連れて来られたのはなぜか。</li> <li>・安い労働力が、アメリカに必要であったのはなぜか。当時のアメリカの産業から考えてみよう。</li> </ul>	T：予想させる P：予想する T：発問し、説明する T：発問し、説明する T：発問し、説明する		<ul style="list-style-type: none"> <li>・（気候的に住みやすいのではないか。そこに集められたのではないか。）</li> <li>・アフリカ系の人々は黒人奴隷として、17世紀から19世紀前半にかけて、アフリカからアメリカに強制的に連れて来られた。</li> <li>・黒人奴隷は安い(無賃金の)労働力として、アメリカに必要であった。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業中心の当時のアメリカで、北部に比べ、南部に多くの黒人奴隷が流入してきたのはなぜか。</li> <li>・南部の農業とは、どのような農業であったか。アフリカ系の割合が高い州は、何を多く作っているか、統計から読み取ろう。</li> </ul>	T：発問する P：答える T：発問する P：資料③をみて、分布が一致する農	③「アメリカの州別統計」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業中心の当時のアメリカで、安い労働力は安い農作物を作るために、必要であった。アフリカ系の人々の多くは、もともと安い農作物を作るために、アメリカに連れて来られた黒人奴隷の子孫である。</li> <li>・北部と南部では異なる農業をしており、南部は多くの黒人奴隷を必要とする農業をしていた。</li> <li>・南部では綿花の生産が多い。南部は、ヨーロッパとは異なる気候で、夏に高温多雨となる。当時は、こうした気候を利用して、ヨーロッパに輸出するための綿花のプランテーション農業を行っていた。</li> </ul>	

<p>・アフリカ系の人口の多い州を着色した地図と農業地域の地図を比べてみよう。</p> <p>・北部の農業とは、どのような農業であったか。</p> <p>●なぜ、アメリカ南部で、アフリカ系の割合が高いのだろうか。</p>	<p>作物を選択する</p> <p>P：着色した州別地図と資料④の地図から分布の一致を確認する</p> <p>T：説明する</p> <p>T：発問し、説明する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p>	<p>④着色した州別地図</p> <p>⑤「アメリカの農業地域」</p>	<p>・ふたつの地図に示された分布はきわめて似通っていることがわかる。空間的な規則性や傾向性をもつ地理的事象を考察するには、分布が一致する事象の発見が有効である。</p> <p>・北部は、ヨーロッパに似た気候で涼しい。そのためヨーロッパに輸出するための農業は行わず、自給自足の農業を行っていた。</p> <p>●家族労働による自給自足の農業を行っていた北部は、黒人奴隷は必要とされなかった。しかし、ヨーロッパに輸出するための綿花のプランテーション農業を行っていた南部では、安いインド綿やエジプト綿に対抗するため、安い労働力として多くの黒人奴隷が必要となり流入してきた。その影響で、現在も南部ではアフリカ系の割合が高くなっている。</p> <p>・人口分布は経済活動と関連がある。</p>
<p>展 開 2</p> <p>・綿花栽培していない北部でも、アフリカ系の割合が比較的高い州（全米平均の12%以上）がみられる。そのような州の名前を挙げなさい。</p> <p>・北部でもアフリカ系の割合が比較的高い州を白地図に着色しなさい。</p> <p>・北部でもアフリカ系の割合が比較的高い州はどこに分布しているか。</p> <p>●北部の大西洋岸や五大湖周辺で、アフリカ系の割合が比較的高くなっているのはなぜか。</p> <p>・北部でアフリカ系の割合が比較的高い州には、どのような特徴が共通にみられるか。</p> <p>・人口密度が高い地域とは、一般にどのような地域か。</p> <p>・メガロポリスや五大湖沿岸工業地域で、商工業が大きく発達したのはいつ頃か。</p> <p>・19世紀後半から商工業が大きく発展したメガロポリスや五大湖沿岸工業地域では、労働力は余るようになったか、不足するようになったか。</p> <p>・19世紀後半から、南部の産業にはどのような変化が起こったか。</p> <p>・19世紀後半からプランテーション農業が変化した南部では、アフリカ系の人々の労働力は余るようになったか、不足するようになったか。</p> <p>・19世紀後半からアフリカ系の人々の間に</p>	<p>T：発問する</p> <p>P：資料③をみて、授業プリントに記入する</p> <p>T：作業を指示する</p> <p>P：州別地図に着色する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p> <p>T：予想させる</p> <p>P：予想する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：資料③をみて、分布が一致するものを選択して、着色した州の分布との一致を確認する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p> <p>T：発問し、説明する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p> <p>T：発問し、説明する</p> <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p> <p>T：発問する</p>	<p>③「アメリカの州別統計」</p> <p>④州別地図</p> <p>④着色した州別地図</p> <p>③「アメリカの州別統計」</p> <p>⑥「アメリカの人口密度」</p> <p>⑦「アメリカの鉄の生産の変化」</p>	<p>・綿花栽培をしていない北部でも、イリノイ州、デラウェア州、ニュージャージー、ニューヨーク州、ミシガン州、メリーランド州では、アフリカ系の割合が比較的高い。</p> <p>・名前を列挙するだけでは分からなかった地理的事象の空間的な規則性や傾向性が、地図化によって見えてくる。</p> <p>・北部でも大西洋岸や五大湖周辺では、アフリカ系の割合が比較的高い。</p> <p>・（あなたに北部にもアフリカ系の人々を必要とすることができた）</p> <p>・北部でアフリカ系の割合が比較的高い州は、人口密度が高い。</p> <p>・人口密度が高い地域は、商工業が発達した大都市があるか、その周辺に位置する。 北部大西洋岸………メガロポリス（米国最大の大都市群） 五大湖周辺………五大湖沿岸工業地域（米国最大の工業地域）</p> <p>・19世紀後半から、アメリカではメガロポリスや五大湖沿岸工業地域を中心に商工業が大きく発展した。</p> <p>・19世紀後半から商工業が大きく発展したメガロポリスや五大湖沿岸工業地域では、多くの労働力が必要となった。</p> <p>・19世紀後半以降も、南部では綿花栽培が重要な地位を占めていたが、綿花の過剰生産による作付制限、綿花栽培の機械化が行われるなど、プランテーション農業に変化が見られるようになった。</p> <p>・19世紀後半からプランテーション農業が変化した南部では、アフリカ系の人々の労働力は余るようになった。</p> <p>・産業構造の変化によって、南部で余剰労働力となったアフリカ系</p>

	<p>どのような人口移動が起こったと考えられるか。</p> <p>●北部の大西洋岸や五大湖周辺で、アフリカ系の割合が比較的高くなっているのはなぜか。</p>	<p>P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p>		<p>の人々が、労働機会を求めて北部へと移動した。</p> <p>・人口移動は諸地域の経済活動の変化がひとつの要因となる。</p> <p>●19世紀後半以降、南部の綿花地帯から北部の商工業が発展したメカゴポリスや五大湖沿岸工業地域の都市への、人口移動が起こった。その影響で、現在も北部の大西洋岸や五大湖周辺で、アフリカ系の割合が比較的高くなっている。</p>
終 結	<p>◎なぜアメリカ合衆国では、同じ国内なのに州によって人種民族構成に大きな違いがあるのだろうか。</p> <p>・1970年代以降になると、アフリカ系の人々の中で北部から南部へのUターン現象がみられるようになってきたが、それはなぜか。</p>	<p>T：発問する P：答える</p> <p>T：資料を提示して発問する P：答える</p>	◎「アメリカの工業地域の展開」	<p>◎州による人種民族構成の相違は歴史的に形作られてきた。州によって中心的な経済活動の形が異なるため、求めるものが異なる。労働力としてつれてこられたアフリカ系の人々を求めたのは、当初は南部の諸州であり、その後、北部の諸州となった。したがって、当初はアフリカ系の人々は南部に集中しており、その後、北部の一部に移動した。それらの人々を求める要素の有無で、州による人種民族構成が変わってくる。</p> <p>・人口分布は経済活動と深い関連があり、その変容は諸地域の経済活動の変化によって生じる。</p> <p>・北部大西洋岸と五大湖周辺にあった工業地域が西部や南部にも広がったため、それらの地域でもアフリカ系の人々の労働力を求めるようになってきた。</p>

## 5. 教授資料

- ①「アメリカの中学生」 教科書：佐藤 久他『社会科 中学生の地理 世界の人々と日本の国土 初訂版』帝国書院，1999年，p.88.
- ②「アメリカの人種民族構成」 同上書，p.89.
- ③「アメリカの州別統計」 二宮道明編『データブック オブ ザ ワールド 2000年版』二宮書店，2000年に基づいて授業者作成。
- ④「アメリカの州別白地図」「着色した州別地図」
- ⑤「アメリカの農業地域」 前掲書，p.95.
- ⑥「アメリカの人口密度」 帝国書院編集部編『新詳高等地図—初訂版—』帝国書院，1999年，p.83.
- ⑦「アメリカの鉄の生産の変化」 浜島書店編集部編『新詳 世界史図説』浜島書店，1997年，p.149.
- ⑧「アメリカの工業地域の展開」 帝国書院編集部編『資料 地理の研究—九訂版—』帝国書院，1998年，p.236.

③ アメリカの州別統計

州名 (アイウエオ順)	面積 (万km <sup>2</sup> )	人口 (万人)	人口 密度 (人/km <sup>2</sup> )	ヒスパニック 人口率 (%)	アフリカ系 人口率 (%)	小麦 生産※1 (百万ブッシェル/万km <sup>2</sup> ) ※2	トウモロコシ 生産※1	大豆 生産※1	綿花 生産※1 (千t/万km <sup>2</sup> )
アメリカ全体	計 963	計 26528	平均 28	平均 9.5	平均12.4	平均 2.4	平均 9.7	平均 2.5	平均 4.2
1 アイオワ州	15	285	20	—	1.9	0.1	117.7	28.5	—
2 アイダホ州	22	119	6	5.8	0.4	5.5	0.2	—	—
3 アーカンソー州	14	251	18	—	15.9	4.8	2.1	8.1	25.8
4 アラスカ州	159	261	2	—	4.1	—	—	—	—
5 アラバマ州	14	427	32	—	25.6	0.3	1.7	0.8	12.7
6 アリゾナ州	30	443	15	20.2	3.4	0.5	0.2	—	5.7
7 イリノイ州	15	1185	79	8.9	15.3	2.8	97.9	26.6	—
8 インディアナ州	9	584	62	—	8.1	2.9	71.3	21.7	—
9 ウィスコンシン州	17	516	30	—	5.4	0.4	19.6	1.9	—
10 ウェストバージニア州	6	183	29	0.5	3.2	—	0.6	—	—
11 オクラホマ州	18	330	18	3.1	7.7	5.1	1.4	0.4	1.6
12 オハイオ州	12	1117	96	—	11.1	4.5	26.3	13.5	—
13 オレゴン州	25	320	13	4.6	1.8	2.7	0.2	—	—
14 カリフォルニア州	41	3188	78	28.4	7.7	1.3	0.9	—	12.7
15 カンザス州	21	257	12	4.3	6.0	12.0	16.8	3.5	—
16 ケンタッキー州	11	388	37	—	7.1	2.7	14.2	4.3	—
17 コネティカット州	1	327	228	7.3	9.0	—	—	—	—
18 コロラド州	27	382	14	13.5	4.3	2.8	4.9	—	—
19 サウスカロライナ州	8	370	46	—	30.1	1.5	3.7	1.7	12.2
20 サウスダコタ州	20	73	4	—	0.6	7.0	18.5	4.6	—
21 ジョージア州	15	735	48	2.0	27.9	1.1	3.3	0.7	29.5
22 テキサス州	69	1913	28	27.3	12.2	1.1	2.9	0.1	13.7
23 テネシー州	11	532	49	—	16.2	1.6	7.2	3.6	13.5
24 デラウェア州	0.6	73	117	—	18.2	6.5	33.9	12.9	—
25 ニュージャージー州	2	799	375	11.0	14.3	1.0	5.7	1.9	—
26 ニューハンプシャー州	2	116	48	1.1	0.6	—	—	—	—
27 ニューメキシコ州	32	171	5	39.1	2.4	0.1	0.5	—	0.6
28 ニューヨーク州	14	1819	130	13.8	17.5	0.4	4.8	—	—
29 ネバダ州	29	160	6	12.1	7.1	0.1	—	—	—
30 ネブラスカ州	20	165	8	3.0	3.8	3.7	59.4	6.8	—
31 ノースカロライナ州	14	732	54	1.4	22.2	1.9	6.3	2.6	16.0
32 ノースダコタ州	18	64	4	0.8	0.6	21.6	3.6	1.4	—
33 バージニア州	11	668	61	3.0	19.5	1.4	3.5	1.5	3.2
34 バーモント州	3	59	24	—	0.3	—	—	—	—
35 ハワイ州	2	118	71	—	2.5	—	—	—	—
36 フロリダ州	16	1440	93	13.4	14.5	—	0.6	0.1	1.8
37 ペンシルバニア州	12	1206	101	2.2	9.6	0.8	10.7	0.9	—
38 マサチューセッツ州	2	609	254	5.6	6.0	—	—	—	—
39 ミシガン州	25	959	38	2.4	14.4	1.0	8.6	1.9	—
40 ミシシッピ州	13	272	22	—	35.9	0.9	5.0	4.3	32.6
41 ミズーリ州	18	536	30	1.3	11.0	2.7	19.6	8.3	7.1
42 ミネソタ州	23	466	21	—	2.7	4.5	38.6	10.0	—
43 メーン州	9	124	14	0.6	0.4	—	—	—	—
44 メリーランド州	3	507	159	3.3	26.4	3.8	20.3	5.6	—
45 モンタナ州	38	88	2	—	0.4	4.6	0.1	—	—
46 ユタ州	22	200	9	5.5	0.8	0.4	0.1	—	—
47 ルイジアナ州	13	435	34	2.3	31.6	0.5	5.0	2.8	21.7
48 ロードアイランド州	0.3	99	310	5.8	4.7	—	—	—	—
49 ワイオミング州	25	48	2	5.7	0.8	0.3	0.2	—	—
50 ワシントン州	18	553	30	5.0	3.3	10.0	1.2	—	—

※1：小麦・トウモロコシ・大豆・綿花の生産については、州の面積に関係なく生産の盛んさを示すために、生産量を州面積で割った数値を示している。

※2：ブッシェルは、アメリカなどで用いられる体積を表す単位（1ブッシェル=35.2386リットル）。

※3：表中“—”は、0または非常に小さな値であることを示す。

## Ⅶ おわりに

中学校地理的分野の授業を例として、授業者がそのような授業を作成するに至るプロセスを、4つのステップとして明示した。本研究では、それらの中でも特に、授業者の社会科学授業観とそれを具体的な形あるものとする社会科学力像の明確化に重点を置き、地理的思考力の構造とその育成の論理の解明、ひとつの小単元で形成を図る地理的思考力の設定を中心に論じた。地理的分野の他単元の授業作成および社会科学の他分野の授業作成に転移可能な、中等社会科学の授業作りの体系的説明となっているといえよう。

授業システム化には、授業改善のための評価が不可欠である。しかしながら、本研究では、授業の作成から、実験授業の実施までを行ったが、第5のステップである子どもたちの学習評価ならびにそれを通じた授業評価までは至っていない。この点の究明は、今後の課題としたい。

(本小単元の開発ならびに実験授業の実施は、土肥大次郎が担当した。)

## 註

- (1) 桑原敏典他「中等社会科学における授業システム化の研究(Ⅰ)―小単元『人身の自由』(高等学校公民科)の開発を例として―」広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第24号, 1996年。
- (2) 鶴木 毅他「中等社会科学における授業システム化の研究(Ⅱ)―高等学校地理歴史科小単元『中国の近代化』を例として―」広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第25号, 1997年。

- (3) 児玉康弘他「中等社会科学における授業システム化の研究(Ⅲ)―解釈批判原理による教授方略―」広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第26号, 1998年。
- (4) 和田文雄他「中等社会科学における授業システム化の研究(Ⅳ)―高校地理教育における世界の民族問題学習を例として―」広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第27号, 1999年。
- (5) 大江和彦他「中等社会科学における授業システム化の研究(Ⅴ)―国家と民衆の交流の歴史を軸として―」広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制『研究紀要』第28号, 2000年。
- (6) 森分孝治, 木村博一, 棚橋健治「社会科学的概念学習の授業構成(Ⅳ)―「東南アジア」の教授書試案―」広島大学教育学部・学部附属共同研究体制『研究紀要』第12号, 1984年。
- (7) 土肥大次郎「地理的思考力育成の論理―米国地理教育カリキュラムARGUSを手がかりに―」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第41巻第2部, 1995年。

Association of American Geographers ed., *ACTIVITIES and READINGS in the GEOGRAPHY of the UNITED STATES -BACK BONE BOOK-*, Association of American Geographers, 1995.

Association of American Geographers ed., *ACTIVITIES and READINGS in the GEOGRAPHY of the UNITED STATES -STUDENT ACTIVITIES-*, Association of American Geographers, 1995.

Association of American Geographers ed., *ACTIVITIES and READINGS in the GEOGRAPHY of the UNITED STATES -TEACHERS' GUIDE-*, Association of American Geographers, 1995.